バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第159号〔2018年5月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 159 号をお送りします。5 月の集会ではハンブルクの井野葉由美 宣教師をふたたびお迎えして、「復活」をテーマにお話しいただきました。

コリント人への手紙 I、15:12-22 節　　『復活の影響』　　井野 葉由美師

多くの人が「イエスの十字架の死までは理解できるが、復活は信じられない」と言います。実際のところ弟子たちも主から復活の予告を聞いていたにもかかわらず全く信じていなかったし、まさに復活している場面の目撃者もいない。ところが復活された主イエスに出合い、彼らは主イエスの復活が事実だと信じる者になりました。それは復活されたイエスが幽霊のような幻覚ではなく、実際に肉体をもち、彼らと共に食事もされる確かな存在だったからです。この体験が弟子たちにとって、どれほど筆舌に尽くしがたい驚きの体験であったかがわかります。

この驚きの体験のあとに聖霊降臨があり、聖霊の働きに導かれて弟子たちが各地へ出向いて福音を宣べ伝えるようになるのですが、彼らは使徒行伝 1 章 8 節に書かれてあるように、主の復活の証人となったのです。「キリストはよみがえり、今の私達に影響することができる」という事こそ、弟子たちが何よりも伝えたい事となりました。

もちろん、主の復活を語り伝えることで命に危険を負った弟子たちもいましたが、彼らはそれでも語ることをやめず、命がけで語り伝えていきました。なぜこうまですることができたのでしょうか？それは紛れもなく、復活が真実だったからです。もし復活が虚偽であり、単なる希望ということだけならば、それを信じる人を指してパウロは 17-19 節で「すべての人の中で最も惨めな者です」と明言していますし、2000 年後の今、キリスト教は消滅していたことでしょう。

【21-22 節】アダムは神から創られたときは死の想定がなかったのですが、自由意志を与えられていた為、神に従って生きる道よりも自分の意思を優先する道を選び、結果として罪が入ってきて死ぬ者となりました。命の源の神様から離れたので、命を保てなくなったのです。そのアダムの遺伝子を受け継ぐ私達は皆、同じく死ぬ運命にあります。主イエスも神の子とはいえ、人類の代表としてアダムと同じように自由意志があり、神から離れる人生を選ぶこともできました。しかし主は自分の意思ではなく、神の意思に従う方を選びました。ここで人類は再び、命の源である神につながったのです。

だから、主イエスを信じる者は全て生かされ、イエス様が受けたのと同じ体を受け、愛と平和と恵みに満たされた場所に生きることが約束されているのです。パウロは、このことは確かに実現することだと断言しています。「復活したら、罪のない者として神様と話すことができる」というこの約束のお陰で、私達は死後の不安に思い悩む必要が無くなり、死別した人々と再会する希望が与えられました。

ところで復活というのは、死んで倒れた状態から力を受けて立ち上がることです。私たちが日常生活でどのような理由で打ちのめされて倒れても、それは終わりではない。立ち上がる力が与えられるということです。「私を信じなさい。そうすればあなたに力を与えよう」と主は言われる。それは、どれほどボロボロになっていても、神様の目に私達は、復活させる価値のある人間だからです。小児麻痺の水野源三さんが祈ったように、「復活の命が欲しい」と願い、祈れば、それは与えられるのです。